

ガリシアのサン・マルティン・デ・スワルナ村の言語生活 As falas dunha aldea de San Martín de Suarna en Galicia

浅 香 武 和

はじめに

サン・マルティン・デ・スワルナ村は、スペインのガリシア州ルーゴ県フオンサグラダ市に属するスワルナ溪谷にある。この村を初めて訪れたのは1990年だったと思う。私は、その前年にサンティアゴ・デ・コンポステーラ大学で開催された第19回国際ロマンス言語学・文献学学会に出席するためにガリシアを訪れ、ガリシア語研究所員アントン・サンタマリーナ（Antón Sanatamarina）教授の知己を得て、正真正銘（galego enxebre）のガリシア語が聞くことのできる静かな村に招待されたのが最初だった。その後、毎年8月上旬には必ず訪れている。サン・マルティン・デ・スワルナ村はサンタマリーナ教授の生まれ故郷なのだ。

この村に、Por guardar casa de avolos danche os xungos polo ollos「祖父母の家を守ること、イグサが目の高さまで伸びてしまう」という家訓がある。どういう意味かという、保守的になると、お前は仕事をやり遂げることができない、ということである。機械や道具を使って草刈りをしろということで、新しいものに挑戦することを論じたものである。言語学的にみると、ガリシア東部の特徴を示す語彙形態（avolos, guardar）がみられる。

小論は、毎年夏になるとこの村に通うようになり、村の言語生活に関心を抱き、ガリシア語がどのように使われているか見聞調査した結果を纏めたものである。最初に訪れたときは、村人は何も語ってはくれなかったが、アントン氏と連れ立って村の中を散歩し、隣人に紹介してくれるうちにだんだん親しくなり村人との会話も楽しいものとなった。

第一章

1 地理的位置

サン・マルティン・デ・スワルナ村は、スベ



村の入り口に立つ地名案内標識

イン北西部のガリシア州ルーゴ県東部にある。県庁所在地のルーゴ市から60キロほどである。ルーゴのバスターミナルからフオンサグラダ市まで、でこぼこな山道を2時間も走った。一番高いシルベラ峠（1120m）からアレショ溪谷（500m）まで標高差600メートルもある。夏でも霧が出て、行く手を遮られたことがあった。夏の朝、東の方角にアストゥリアスの山々が雲海に包まれるのを時々見ることができる。スペインが欧州連合に加盟してから国内の道路も良くなり、県道も整備され今では1時間ほどで行ける。この辺りは、サンティアゴ巡礼路の旧道があるので、巡礼者と出会うことがある。また、森にはオオカミが生息していることからフオンサグラダ市は「ルータ・ドス・ロボス（狼の道）」というキャンペーンを企画し、毎年春に山道50キロを自転車で行くツアーがある。私は山道を歩いていて、一度、狼の頭骨を見つけたことがあったし、兎と遭遇したこともあった。森に生息している動物は、狼のほかに猪（xabaril, または porco bravo ともいう）、ノロ鹿（corzo）、野兎（lebre）、狸（porco teixo）などがある。

スワルナ溪谷は3つの教区から成る。サン・マルティン、ピラボル、ピラール・ダ・クイー

ニャ。三教区の下に7から8の小教区がある。行政上はフオンサグラダ市に属する。200年前まではプエブラ・デ・ブロンに属していた。サン・マルティン教区がルーゴ司教区に属し、あとの2つの教区はアストゥリアス州のオビエド司教区に属している。こうしたことによりガリシアとアストゥリアスの2つの言語文化圏が交錯している。

2 交通・通信

現在、ガリシア州ルーゴ市からアストゥリアス州オビエド市に続く国道がある。国道敷設工事は1920年代に始まったが、スペイン市民戦争で中断した。戦後、全線が開通してアストゥリアス州のカングス市へも行けるようになった。渓谷地帯の道路は農業用のトラクターが往来するだけのものだったが、今では森林道路もあり快適なドライブを楽しめる。ただしカーブが多いので運転はきつい。また山岳地帯を走ると、風力発電の施設があちこちに設置されているのを確認できる。自然環境を破壊するものであるが、新しいエネルギー源として稼働している。携帯電話での通信は、条件により電波障害が発生して時々繋がらないこともある。

3 経済

小規模農地の農牧業を主とする地域である。現在は自給自足経済である。過疎地域のため古い習慣も残っている。マタンサ祭は、村総出で腸詰の作業をする行事だ。

数年前の訪問の折には、サンタマリーナ家のアストゥリアスの親戚から戴いた小麦粉を捏ねてガリシアの代表的な料理エンパナーダを竈で焼いてくれた。オープンレンジで焼くより煙たいが、竈に薪をくべて作ると焼き具合と風味を確かめながら楽しく作り上げることができるのが何よりもいい。エンパナーダはガリシアに中世から続く伝統的なパイで魚や肉や野菜などの具を中にいれて焼くファーストフーズとでも言える。信州の「おやき」のようなものだ。竈で薪をくべての料理は、実にいい色合いと美味しく仕上がる。エンパナーダ・メンタル (empanada mental) ということばがあるが、いろいろな考えが錯綜している様を表すときに使うようだ。

どこの家庭でも竈と囲炉裏はまだ存在してい

る。燃料にする薪も自分の山から拾い集めたものだ。山林は伐採された後に、植樹も行われている。ライフラインの電気・プロパンガス・水道・電話は敷設されている。週に何度か移動販売車が夕方になりパンを売りにくるのを見かけることがある。かつては、どこの家でもパンは自家製の竈で焼いていたものだが、今では高齢者は町まで歩いて出かけるのは大変なので移動販売車に頼っている。

村人によると数十年前に大雪が降り、村へ続く道路は数週間通行不能となり、物資の輸送が途絶えたこともあったという。

秋のマタンサ祭は、村総出の伝統的な行事である。豚を殺す役目の人はマタチン (matachin) と呼ばれる。秋の11月から12月にかけて冬の保存食用に男衆が豚を殺して、女衆は腸詰や塩漬けにする作業を村で行う伝統的な行事だ。血肉入りのモルシージャス (morcillas)、シャモイス (xamóis もも肉)、ラコイス (lacóis 肩肉)、トウシン (toucin バーコン) などいろいろなものを作る。できあがった腸詰は納屋に吊るし、時間をかけて燻す。9月にフオンサグラダ市パドロンのサンタマリーナ家の親類を訪ねた時、納屋で腸詰を燻していたのを見たことがあった。

次の写真は、昨年サンタマリーナ家を訪問した際に撮影したもので、納屋に吊るして保存している食料は手前からドングリ (landra)、アーモンド (améndoa) などの木の実、2番目と3番目に腸詰のブテロ (butelo)、4番目から7番目にシチューに使う臓物の腸詰チャンファイナ (chanfaina) などである。こうした詰め物は、マタンサ祭で、村の衆が参加して作り上げたものを各家に配分して、持ち帰って保存しているものである。

ガリシア東部のフオンサグラダ市を中心とする地域は腸詰が特産品である。毎年2月の第一土曜日にかけてブテロ祭が開催され、最高の腸詰を選ぶ品評会がある。この土地で腸詰を作る業者が目抜き通りに出店を開く。市民はエントロイド (entroido 謝肉祭) のご馳走の準備にお気に入りの腸詰を買い求め賑あう。ソルサ (zorza) は辛味の強い豚肉の詰め物で友人のペルフェクト・コンデ氏の好物だ。



納屋に吊るされた様々な腸詰と木の实など
(Casa da Igreja)



サン・マルティン・デ・スワルナ村のオーレオ
(Casa de Villaverde)

もう一つ、ルーゴ県ビラルバ市では12月のクリスマスの前々日に、カポン祭 (O Capón de Vilalba) がある。これは18世紀から続く行事で、鶏肉を販売するガリシアの伝統的な市だ。

村には合計11のオーレオ (hórreo 穀倉) があり、そのうち村の真ん中に4つの大きなオーレオがある。一番大きいものは、ビジャベルデ家のオーレオだ。5.5m×5.5mの正方形で栗の木を使った木造高床建築。屋根瓦はルーゴ産のロウサ (louza) が葺いてある。ガリシアでは至る所で穀倉を見ることができるが、呼び名は異なりオーレオが一般的だが、西部ではカバソ、東部ではカナストロ、ピオルノなどとも呼ばれている。形も正方形、長方形、丸形、八角形といろいろあり、材質は木造と石造のものがある。フオンサグラダではオーロ (horro) と呼び、形は正方形で、材質は木造が主流だ。ガリシアで一番大きいオーレオはカルノータにある長さ35メートルもある。土台に必ずネズミ返しを取り付けられている。

村の結 (ゆい) の精神について記しておく。先にあげたマタンサは、労力が必要な作業を村の住民が総出で助け合い協力し合う相互扶助の精神が生きている。数年前の夏に訪れたとき、カルバジド家の排水管が詰まって困っていたら、村の数人が道具を持ち寄り、ああだこうだ言いあいながら無事修復工事を成し遂げることができた。これも結の精神である。

4 人口

現在サン・マルティン・デ・スワルナ村は、38軒166人である。1960年代は3村あわせて1,000人ほどいたが、出稼ぎのため村を棄て南米やヨーロッパのドイツやスイス、または国内のバロセロナ、マドリードなどの大都市に働きに出ている。休暇になると村に帰ってくるという。道路が完備してからは、ガリシアの都市ルーゴまで車で通勤している人もいるし、200キロほど離れているビーゴやア・コルーニャの都市では家を借りて家族で働き生活をして、週末は村に戻る人もいる。山村をあちこち見てまわると、廃屋になった家もあり人口流失が進み廃村寸前のところもある。村に生活している人の平均年齢は70歳ぐらいだ。とくにアレシヨ、ミラジョス、アイリシン、ピラールは住民ゼロとなり廃村となった。サン・マルティン・デ・スワルナ村の小学校もすでに廃校となっている。時々、カステイーリャ語で vende 売ります、alquila 貸します、ガリシア語で alúgase 貸します、などの貼紙や看板を目にすることがある。

今年になって売家が一軒でたようだ。調べて見ると4 LDK, 120㎡で13万ユーロとある。日本円で約1,800万円である。土地付きでこの値段だ。自然環境は抜群だが、日本から二日はかかる。東京→パリ (泊)、パリ→サンティアゴ、サンティアゴ→ルーゴ経由フオンサグラダ→サン・マルティン・デ・スワルナ着である。

通婚圏を記すと、大体この村の男たちは近隣

の村の女性と結婚している。村祭りは男女の絶好の社交の場だ。車のない時代は歩いて5~6時間もかけてアストゥリアス州のグランダス・デ・サリメまで出かけたこともあったようだ。30キロほどの山道ある。サンタマリーナ家は、1600年頃から続く家柄だ。初代はナバラ王国出身で、ガスコーニュ語 *Burguet* の名字を持つ人が婿入りしたらしい。アントンの曾祖母はサン・マルティンの生まれでアストゥリアス州ベイガのコブレ出身の木樵と結婚、祖父はアストゥリアス州サンタージャ近くのブスケイマード出身の女性と結婚、父はフオンサグラダ近郊のブロンの女性と結婚。そして、アントン自身はサンティアゴ大学ガリシア語学科で知り合ったガリシア北西部ア・コルーニャ県サダ出身の女性と結婚している。

サン・マルティン・デ・スワルナ村の22軒は、屋号とか通称で呼ばれている。村の上から下へ順に記すと次のようになる。Casa da Igrexa (教会の家・教会のそばにあることから命名された), Casa do Cura (司祭の家), Casa do Tío Xan (シャンさんの家・tíoは一般に伯父の意味だが、ガリシア語では敬称として使われる), Casa do Ferreiro (鍛冶屋), Casa da Pena (岩屋・大きな岩があるところに建てられていることから命名された), Casa de Maripepoa (マリペポアの家・マリアと愛称のペポアを組み合わせた命名) または Casa da Torre (塔の家・嘗て3階建てであったことから命名された、1階部分は家畜の住まいとして使われたが現在は取り壊されている), Casa do Blanco (ブランコ家), Casa do Perico (ペリコの家・ペドロの愛称から命名された), Casa do Seco (セコ家), Casa do Branquín (純白屋), Casa de Villabol (ビジャボル家), Casa de Villaverde (ビジャベルデ家), Casa de Quizán (ケイサン家), Casa de Carballido (カルバジド家), Casa de Minguxo (ミングショの家・名前ドミンゴの縮小辞から命名された), Casa da Puridiña (坂道の家・坂道に建っていることから命名された), Casa de Moia de Riba (上モイヤ家・モイヤ村から引っ越してきて住んでいることから命名された), Casa de Moia de Baxo (下モイヤ家), Casa do Galego (ガリシア家・ナ

ビア地方 Galego から移転して住んでいることから命名された), Casa de Mongarillo (モンガリジョの家・モンガリジョ地方から引っ越してきて住んでいることから命名された), Casa de Zreixido (スレイシドの家・スレイジド村から引っ越してきて住んでいることから命名された), Casa da Chaila (平地屋・平らなところにある建物があることから命名された)。

Casa の後に前置詞 *de* がくると名字であり、*do, da* (前置詞 *de*+定冠詞 *o, a* の縮約形) の場合は普通名詞または字名がくる。形態論的に見ると *Branquín* は *branco* (白い) の縮小辞で、*-ín* で終わる接尾辞はガリシア東部の特徴である。もう一つの縮小辞 *-iña* はガリシア中央・西部地域で使われる形で、*Puridiña* となる。二重母音 *-ai-* はガリシアの中央・西部では *baixo* (下の) であるが、スワルナ村では *baxo* となる。

第二章

言語事実

移民した者たちの中には、移民先の大都市に残りガリシア語を棄ててカスティーリャ語を選択するものもいる。しかし、ガリシア人の結束は固く、移民先でガリシアセンターを開設して故郷の文化を伝える運動もなされている。

一方、スワルナ溪谷の村では、共通言語はガリシア語である。カスティーリャ語は学校と教会で使われ、さらにラジオ・テレビ・新聞の言語として普及していった。従って、カステラニスモ (カスティーリャ語主義) は新しい物質文明の到来とともにさまざまな分野において影響を与え、ガリシアでは語彙面で借用語として使われるようになった。音声・形態・統語面では、カスティーリャ語の受容は少ない。カステラニスモの例を見ると、曜日名はガリシア語からカスティーリャ語にとってかわり、月曜日 *lúis* → *lunes*, 水曜日 *mércores* → *miércoles*, 金曜日 *venres* → *viernes*, 月の名前も同様に、1月 *xaneiro* → *enero*, 6月 *xuio* → *junio*, 7月 *xuillín* → *julio*, 人名も シャン Xan → Juan, ショコ Xoco → Francisco, シュイアー Xuiá → Julia などが移入された。これは学校教育と教会の言語干渉によるものだ。多くの場合、カステラニス

モは完全にガリシア語にとってかわりつつある。

こうした言語事実はカストラポ（カスティーリャ語化したガリシア語・でたらめな言い方）と称されている。ガリシアでは古い形式を使いながら、新しい形であるカステラニスモを共存させる言語状況が続いている。一般に、女性たちは村に残り生活しているのでことばは保守的といえる。ガリシア語を温存しているわけである。一方、男性は村を出て仕事のため都市で生活した経験から、改新的な事象が窺える。

先ほどあげたカルバジド家のタビーさんは年齢93になる。1960年代、ルーゴに出て政治活動をしたようだが、今は義理の妹さんと村で慎ましく生活している。そのタビーが、夕食後の9時頃になると決まってサンタマリーナ家にやって来る。四方山話をするためにだ。話し相手をするのはだいたいアントンの兄弟のロッキーだ。ロッキーは現在ア・コルーニャに住んでいるが、大学を出て獣医師としてアメリカに渡った。博識がある人物だ。彼らの話を聞いていると、カスティーリャ語で通している。時々、ガリシア語の単語が出てくるくらいだ。当然、タビーの話す言葉にはカステラニスモもある。一方、私がタビーの家に何度か尋ねたことがあった。すると妹さんの方は、ガリシア語で対応してくれた。ガリシア語を研究する一外国人の私にとってはありがたいことだ。ガリシアには多くの民話や仕事歌が語り継がれてきている。サンテ



タビーさんと筆者2015. 8

ィアゴ大学ガリシア語研究所ではこれらの語りや歌を残すために、言語学者のサンタマリーナ教授とスイスの音楽学者シュバルツ教授が長年

にわたり採集したものを纏め *Cancioneiro popular galego* 『ガリシア民謡集』（Fundación Barrié, A Coruña, 1984-1995）という7巻本でCDを付けて刊行した。浩瀚な素晴らしい資料である。

さて、そのカステラニスモは、強調したり、叱ったり、宣誓したりするときに頻繁に使われる。例えば、¡Venga usted acá! こっちへ来い、¡Me cago en la (または en la の代わりに na) puta leche! くそつたれ、¡Tengo dicho y tengo dicho y basta! 言ったよ 言ったよ もういいだろう、などである。

言語衝突は体系の相違から誘発される言語干渉である。カスティーリャ語によって生じた害悪は、ガリシア語の純化に不健全な言語活動を生んでいると、レアル・アカデミア・ガレーガ（ガリシア翰林院）は危機感を募らせている。

1 サン・マルティン・デ・スワルナ村のことばの特徴

ある地域のことばの特徴を示すことは、他の地域のことばと比較することである。このような定理に基づき、村の言語現象をガリシアの他の地域の現象と比べながら述べてみたい。

① 音声面

- 1)ヘアーダ (gheada … g の音が咽頭摩擦音として発音される現象) 都市名の Lugo はガリシア中央・西部では Lugo /luho/ ルーホと発音される。これがヘアーダである。とくにガリシア西部の海岸地帯ではよく耳にする現象だ。スワルナ村ではガリシア東部の他の地域で発音されるのと同じく Lugo ルーゴと発音されヘアーダは存在しない。
- 2)セセオ (seseo … c/θ/を s/s/で発音する。無声歯間摩擦音を舌尖歯茎音で発音する現象) ガリシア中央・西部ではセセオにより faser と発音されるのに対して、スワルナ村では facer (～する) と発音されセセオの存在はない。
- 3)強勢アクセントのある母音 e, o についてフオンサグラダからエオナビア地域では、mèdo 恐怖、còrpo 体、のように e, o は開母音であ

る。ガリシアの他の地域は閉母音 *mêdo*, *côrho* である。
しかし二重母音 *oi* の場合はフオンサグラダを中心とする地域は閉母音である *despôis* 後で, *nôite* 夜。しかし, *xamôis* ハム、は開母音である。かなり例外のある規則である。

② 形態面

4) 二人称単数形主語代名詞の形態は Tu スワルナ村では Tu *ben o sabes* お前はそれを良く知っている、ガリシア中央・西部では Ti *ben o sabes* である。

5) /kw/, /gw/ の維持

スワルナ村では *cuatro* 4, *guardar* 保存する、のように母音 *u* を維持しているのに対して、ガリシア中央から西部地域では /k/, /g/ と単純化して *catro*, *gardar* である。

6) 組み字 -ax- の維持

スワルナ村では *axada* 鋤、*baxar* 降りる、*faxa* 帯、であるのに対して、ガリシア中央・西部では *aixada*, *baixar*, *faixa* のように中間に -i- 母音が挿入される。

7) 母音間の -n- が消失

ラテン語 *luna* 月 > 中世ガリシア語 *lũa* > 現代ガリシア語 *lua* と進展した。

母音間の -n- が消失したことにより、中世ガリシア語では前の母音 *u* が鼻音化したが、現代ガリシアでは鼻音化が消えた。

二重母音にならない母音の連続で最初の母音が鼻音化する場合は、スワルナ村では古い形 *lũa* を温存している。「平地」を意味する中世ガリシア語の *chão* は、*chao* 又は *chau* に進展してガリシア東部で使用されている。ガリシアの中央・西部では地域では *chão* > *chan* と変化したように鼻子音 *n* が現れている。

「月曜日」を表すラテン語 *lunae* は、スワルナ村では *lúis*, ガリシア中央・西部では *luns* または *lus* である。

8) 二重母音 -ui- の出現

スワルナ村を含むガリシア東部では *multo* たくさんの、*luita* 戦い、*escuitar* 聴く。ガリシア中央・西部では *moito*, *loita*, *escoitar* である。

9) -n で終わる語の複数形の形態

単数形の *ladrón* 泥棒→スワルナ村では *ladrois*, ガリシア中央・西部では *ladróns* 又は *ladrós* である。単数形の *can* 犬→スワルナ村では *cais*, ガリシア中央・西部では *cans* 又は *cas* である。

単数形の *pantalón* スボン→スワルナ村では *pantalóis*, ガリシア中央・西部では *pantalóns* である。

10) -l で終わる語の複数形の形態

ガリシア中央・西部では *animal* 動物→*animais*, *especial* 特別な→*especiais* であるが、スワルナ村を含むガリシア東部では *animales*, *especiales* となる。ガリシア語の複数形をつくるメカニズムは低下して、規則的な複数形を取り戻したのはカスティーリャ語の圧力が誘発した現象とみる。地名においては、ガリシア語の複数形の形態は忠実に守られ *Peizais*, *Ervellais* を確認できる。ガリシア州のフオンサグラダ市からアストゥリアス州に入ると *Pezáis* という村がある。州境辺りはガリシア語が使われている。

11) 母音間の -l- の維持

スワルナ村ではラテン語 *molīnu* は *molín* 水車小屋、に進展したようにラテン語の -l- を維持している。これはガリシア東部の言語に共通している保守的な特徴である。同様に *avolo* 祖父、*freixolo* 小葉・クレープ。ガリシア中央・西部では *muiño*, *avó*, *freixó* のように -l- は消えた。さらにスワルナ村では、*calecer* (*quecer*) 温める、*calente* (*quente*) 熱い、*orizolo* (*orizo*) 毯、*garañola* (*grañoa*) 蕁紐、*colòbra* (*cobra*) 蛇、*beligo* (*embigo*) 臍、のように -l- が維持されている。() 内の語形はガリシア中央・西部で使われる形態。

12) 弱形代名詞 *ol*, *al* の形態

Dámol 私にそれをください (カスティーリャ語 *dámelo*)、*coméuol* 彼はそれを食べた (カスティーリャ語 *comiólo* → *lo comió*)。ガリシア中央・西部では *dámeo*, *coméuo* である。弱形代名詞は *o* であるが、語末に -l を添加したのは改新的な特徴といえる。*Tráiol* それを持って来い、*non ol traías* それを持ってくる

な。男性形 *ol* から女性形 *al* が作られたと考える: *dámal*, *coméual* となる。

13) アクセントのない接尾辞

lízcaro 機敏な, *lónregra* 動物のカワウソ、*xémara* 背中を痛めた、のような語は接尾辞にアクセントがない。ロマンス諸語において派生接尾辞はアクセントがあるが、アクセントのない接尾辞は前ロマンス語の残余なのか、研究の余地がある。

14) ラテン語の語尾 *-inūm* の進展

スワルナ村を含むガリシア東部では *-in* に進展した: *vecín* 隣人, *toucín* 豚の脂肪, *camín* 道。男性複数形は *-ins* ではなく、*-ius* となる。「隣人」の男性複数形は *vecius* である。女性複数形は *vecias* となる。『ガリシア言語地図 II』(1995) を見ると、散発的ではあるが *camis* という形態も確認できる。ガリシア中央・西部では *-iño*: *veciño*, *touciño*, *camiño* で、女性複数形は *veciñas* である。

15) 縮小辞 *-in* は単数男性形、女性形は *-ia*:

nenó 男の子 → *nenín*, *paxaro* 鳥 → *paxarín*。地名にも *Airixín*, *Mosteirín*, *Salgueirín* などがある。

女性形は *xestías* (*xestiñas*) エニシダ、*cocía* (*cociña*) 料理。() はガリシア中央・西部の語形。

縮小辞 *-in* で、考えさせられる単語がある。テレビジョン・ガリシアで子供番組に「シャバリン・クラブ (*xabarín* 猪)」がある。レアル・アカデミア・ガレーガ (ガリシア翰林院) は *xabaril* の形態を推奨しているが、なぜガリシアの東部の形態を取り入れたものであろうか。他に *xabariño*, *xabará* (複数形 *xabaris*) のような語形がある。

もう一つ *in* について思い出すことがある。学生時代の友人でプログレと呼ばれていたアストゥリアス出身の彼は、いつもタバコ一本と言うときに、決まってウン・シリンドリン (*un cilindrin*) と言っていた。もちろん俗語である。この縮小辞はガリシア東部からアストゥリアスにかけても使われている。

16) 動詞・直説法完了過去一人称単数形の語尾

ガリシア中央・西部では *cantei* だが、ガリシア東部では *cantein*, *cantín* 歌った、*chigueín* 着いた、のように語尾に *-in* が使われるのはアナロジーなのか。嘗て、ガリシアとアストゥリアスの州境の村で休憩したときに *conocín* 私は知った、という語形を耳にした。カスティーリャ語 *conocí* + 語尾 *in* である。明らかにハイブリッド (混種語) なカステラニスモである。ガリシア語は *coñecín* である。また、*coñezcamos* という接続法現在一人称複数形の奇妙な語形を確認した。ガリシア語 *coñezamos* + カスティーリャ語 *conozcamos* の混成変種形ともいう語形だ。

③ 改新的特徴について

17) 語中音の母音が消失して *-lg*, *-ld* が現れる
ラテン語 *natis* 臀部 > 中世ガリシア語 **nad'ga* > *nalga* のように変化し、スワルナ村では *nalga* である。ガリシア中央・西部では *natis* > **nad' ga* > *nádega* のように変化した。同じような現象に、スワルナ村では *leldar* 発酵させる、ガリシア中央・西部で *levedar* である。スワルナ村では *coldo* 肘、ガリシア中央・西部では *cóbado* である。植物の *nelda* イソハッカ、はスワルナ村の語形で、ガリシア中央・西部では *nébeda* である。この現象はスワルナ村と隣接するアストゥリアス地域のことばにも同様の事実が生じている。

18) 語尾に母音の *i* が挿入される

スワルナ村だけでなくガリシア東部にかけてみられる現象で、*bercio* ゆりかご (ガリシア中央・西部では *berce*, または *berzo*), *partio* 分娩 (ガリシア中央・西部では *parto*), *lendia* 伝説 (ガリシア中央・西部では *lenda*), *coucia* 蛾 (ガリシア中央・西部では *couza*) である。

これらの語は、ガリシア東部と隣接するアストゥリアスのガリシア語地域にも少しく異なる類似した形態がある。フオンサグラダ市を含むスワルナ村だけの突発的な現象ではない。

19) 地名にみる語頭の *-l* 口蓋音化

フオンサグラダ市の近くに、Llencias, Llouxas という地名がある。これはラテン語の語頭のLがllに変化したのである。ラテン語のLINTEUM 亜麻布、が Llencias という地名になった例である。アストゥリアス・レオン語でも同様の現象が生じている。一方では口蓋化しない Lencia という地名もある。

④ 語彙について

スワルナ村で使われる語彙をリストアップしたものがサンタマリーナ教授の書斎にあるが、これらを全てあげるわけにはいかないので、いくつか気が付いた語をあげておきたい。

Cuzo / cuza: 雄犬と雌犬。ガリシア中央・西部では can / cadela であるが、ガリシア東部では cuzo が使われている。

Can はラテン語 cane から進展した形態だが、cuzo の起源は不明である。ガリシア語辞書によると擬声語からきたとある。アストゥリアス語でも同様の語が使われ、雄犬は can, 雌犬は cusa という形がある。仔犬を呼ぶときに cuzo というのを耳にしたことがある。

Dolo: ラテン語 dolu に由来する語で、哀れみ・苦しみという意味。Daba dolo velo 彼を見るのはかわいそうだった、darlle a algo sen dolo 彼は苦しまず気分が悪くなる、のような言い回しがスワルナ村では使われている。この語は、アストゥリアス州のガリシア語地域タピアを調査した Xosé Miguel Suárez Fernández, *Vocabulario de Mántaras (Tapia) Aportación al léxico del galego-asturiano*, A Caridá, Xeira, 1996のなかに、¿Nun vos dá dolo ver tanta xente pasando fame? 多くの人が飢えに苦しんでいるのを見て不憫に思わないか、という文がある。

Engalar: 飛ぶ。ガリシア中央・西部では voar である。この語はアストゥリアスのガリシア語地域エオナビアでも使われている。シャビエル・フリーアス (Xavier Frías) の作品に *El Xabaril que quería engalar* (1991)『空を飛ぶ猪』がある。Foiras: 下痢。下痢を表す語は、ガリシアでは一般的に cagarria または diarrea であるが、スワ

ルナ村では foira である。この foira は furrica に由来するのか、ガリシアでは散発的に現れている。

Gruña: 果物の芯を意味する語。ガリシア中央・西部では carabuño である。この語はスワルナ村から20キロ北西に位置するリベイラ・デ・ピキーン (Ribeira de Piquín) でも使われている。Piquín は pico の縮小辞で語尾-in はガリシア東部の特徴である。さらにアストゥリアス西部では goña, güeña という形態がある。スワルナ村からリベイラ・デ・ピキーンまで、山道を車で1時間弱かかる。600人ほどの小さな村で、数年前にこの村出身のガイタ奏者の名手ショセ・セイバネの胸像が建立された。現代を代表する女性ガイタ奏者スサーナ・セイバネの祖父である。

村の広場にカーサ・オラシオがある。鱒料理を食べさせてくれるレストランだ。8月の暑い日このレストランに行ったことがある。注文してから出てくるのに小一時間かかった。料理が出てくるまでワインを飲みながらお喋りを楽しむわけである。時間は実にゆっくり流れている。エオ川とロディル川が入り交じる清流に棲む鱒は生き生きして、鮮度は抜群だ。生簀があるが、川まで釣りに行ったのかと思うくらいだ。鱒はラテン語で tructa である。ラテン語から進展してガリシア語では西部・中央で troita, ルーゴ県



オリーブ油で炒めた鱒にサラダ添え
(Casa Horacio)

東部では truita と言われている。アストゥリアス語でも truita, カスティーリャ語では trucha で

ある。フオンサグラダあたりでは *trutia* と呼ばれる。隣接する2音の位置 (-it- > -ti-) が転換するメタテセ (*metátese* 音位転換) という現象である。そして鱒を捕える仕掛けはナサ (*nasa*) であり、水コケ (リマケイラス *limaqueiras*) のあるところに仕掛けると鱒がかかる。

おわりに

ガリシア語は中世期に抒情詩が栄えたが、大凡1400年から1800年頃までの400年間、書き言葉としての地位を失いながらも話し言葉としては人々の口に生きながらえていた。

サン・マルティン・デ・スワルナ村の現在のことはガリシア語の古い形態を残しながらも改新的な要素が入り、さらに、カステラニスコが導入されている。隣接するアストゥリアス・レオン語の要素も介入している言語の交錯地帯といってもよい。

サン・マルティン・デ・スワルナ村で、畑仕事をしている農夫に、使っている万能(まんのう)の名前を訊くと、右の写真のようなものは *gaviocho* だという。しかし、良く調べると二本歯の万能は *gaviocho*、三本歯は *gaviocha*、四本歯は *garabato* である。アストゥリアス地方では *garabatu*、または *dalla* と呼ばれている。

近隣のカラセドとブロン村では *picaña* である。10キロしか離れてなくても呼び名が違う。おそらく移入経路が違うことにより名前が異なるのであろう。

草を刈る「大鎌」はガリシア中央・西部では *gadaña* (ゲルマン語 *waidanjan* から派生した語らしい) が一般的だが、さらに *rancallo*, *raña* と呼ぶ所もある。「小鎌」は *podón* であるが、*fouciño* と呼ぶ地域もある。「鍬」は *sacho* である。農耕用具にしても実に豊かな語彙が存在している。

以上、サン・マルティン・デ・スワルナ村の言語事情を社会言語学的かつ言語学的に概観してみた。



Agradecemento:

Isto é a miña memoria de visita-la aldea ben bonita do Val de Suarna, é dicir, San Martín de Suarna.

Eiquí quero deixar constancia do meu agradecemento ó Estimado Profesor D. Antón Santamarina (brañego da Fonsagrada) do Instituto da Lingua Galega da Universidade de Santiago de Compostela, que me deu muitas axudas pra facer este traballín.

Takekazu Asaka

Bibliografía:

Antón Santamarina, ed. (2003): *Dicionario de Dicionarios*. Fundación Pedro Barrié de la Maza, A Coruña.

Antón Santamarina et al. (1987): *Fonsagrada y su concejo*. Editorial Evergráficas, León.

Antonio Santamarina (1974): *El verbo gallego*. Verba, Anuario Gallego de Filología, Anejo 4, Universidad de Santiago de Compostela.

Francisco Fernández Rei (1990): *Dialectoloxía da lingua galega*. Xerais, Vigo.

(本学非常勤講師)